

<報告> 『教職ゼミ』への挑戦：  
学生を教師に導くための方策

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 雅則, 田原, 広史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4604">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4604</a>

# 《報告》 『教職ゼミ』 への挑戦

— 学生を教師に導くための方策 —

木村 雅 則 ・ 田 原 広 史

## 1 はじめに

本報告では、国文学科が現在おこなっている教職支援の取り組みの現状の一端を紹介する。国文学科ではこの一〇年間、学科の特色を模索してきたが、国語・国文学を専門的に学んだ国語教員を養成することが学科のミッションの一つとして適うものであるという結論に至り、現在それに向けたさまざまな取り組みをおこなっている。一つめは、「教職懇談会」と称して、教員となって活躍している卒業生を招き、教員を目指している学生に、教師としての心構え、現在の現場の状況、本人が教師になっただけかや経験について語ってもらおう場を設けていること、二つめは、「教職面談」と称して、二回生の秋期が始まる前に教職希望者の個別面談をおこない、本人の意思と成績を確認し、三、四回生に向けてのスタートを切るための後押しをしていること、そして三つめが、ここで紹介する『教職

ゼミ』である。ここに至るまでに五年程度の時間がかかった。平成二七年度段階でやっと教職支援・対策の三本柱として、先の希望が見えてきたような気がしているところである。

ここで紹介する『教職ゼミ』に至るまでに、「教職採用試験対策講座」を二年間にわたり実施したことをあげておく必要がある。これは夏休み及び春休みに希望の学生を募り、それぞれ六コマ程度で採用試験の過去問を解き解説をするというものであるが、毎回一〇名程度の受講者があった。しかし、講座に出席している間はそれなりに勉強に取り組んでいるものの、日々の諸事に流され、目標に向けての継続的な取り組みがしにくいようであった。また状況として、教員採用試験にたどり着くまでには教育実習を初めとしたさまざまなハードルがあり、それらを一つ一つクリアしていないことには、教師という職業にたどり着けないという事実がある。要するに、試験対策だけでも結局は目標にたどり着けない、ということを改めて認識したのである。

学生たちが教師になるという夢を実現するために何が必要か、そして学科として何がしてやれるのか。そのような模索の先にたどり着いたのが『教職ゼミ』である。自らが希望した目標を達成するために、成績や単位に振り回されず、自分が必要なときに必要に応じて参加し、解決の道が得られ最終的に夢が叶えられる、そんな場になりたいと思い、このゼミを始めた。以下では具体的な内容と事例、そして今年度の成果について紹介する。

## 2 日程と対象

毎週金曜日一限、春期・秋期とも一五コマ、通年で三〇コマを宛てた。

対象としては、基本的に春期は四回生、秋期は三回生を主なターゲットとした。ただしこれにこだわらず、春期・秋期とも二回生以上は適宜参加可能とした（実際には、時間割の関係もあったためか、主ターゲット以外の参加はなかった）。

参加人数は以下の通り。

春期：第一回参加者は全員四回生で七名、個々の回の参加者一〇三名。

秋期：第一回参加者は全員三回生で一一名、個々の回の参加者三〇四名。

## 3 内容・注意事項など

最初に「参加時アンケート」として、志望先だけでなく、志望動機・性格・今後の進路予定・勉強計画など、かなり詳細な点まで記入させた（スケジュール調整とともに、面接対策の一環も狙ったつもりである）。ゼミの内容そのものは「教職に関することなら何でも可」とし、具体的には、次のような内容をプリントにして春期・秋期の第一時に配布した。

\* 春期に配布したプリント内容（全文） \*

### 平成二十七年度「国文・教職ゼミ」について【覚書】

① 自主・自由参加。自主的に活動内容を決めて取り組むこと。指導が必要な場合は、申し出ること。指導は個別対応を基本とする（「対策講座」のような一斉講義の授業ではない）。

② 最初の出席時に「参加時アンケート」（ピンクの紙・両面）を提出すること。

③ 出席・単位は無関係とする。必要な時に参加し、不要になれば参加しなればよい。

④内容は、国語科教職のことなら何でもOK。できることは何でもします！

【指導を必要としないことの例】

例1 採用試験の勉強タイム（一般・教職ももちろん可。筆記・小論文など）

例2 教育実習の準備（教材研究・教案作成など）

《指導を必要とすることの例》

例1 採用試験関係：専門教養の問題解答添削・小論文添削・勉強方法の相談など

例2 教育実習関係：事前アドバイス・教案指導など

⑤参加人数によってそのコマ内では時間不足になる場合が考えられる。事前のアポや参加学生諸君での順番決めなど、トラブルの無いように工夫すること。また、添削関係ではメール＋添付ファイルも積極的に活用すること。

⑤春期は四回生、秋期は三回生がメインになると予想しているが、あくまで「自主参加」なので学年にはこだわらない（四回生が秋期に参加しても良い。二回生の参加もあり得る。）

⑥担当の木村雅は、金曜午後も時間を取ることは可能であるが、

一応「金・一」を標準とする。なお、メールでのやり取りは、二四時間三六五日OKである（二四時間以内に必ず返信する）。  
⑦この覚書に記載のないことについては、社会人としての常識で判断し、時間対効果の高い方法を考えることとする。

以上

#### 4 内容の実際

春期：最初のプリントに従って、個々の四回生からの質問対応がほとんどであった。内容は、教育実習の教案添削指導、教材研究のポイントの解説指導、採用試験過去問の記述解答添削などである。また、この教職ゼミの時間を利用して、採用試験の過去問や問題集を自学自習する学生も継続的にいた。

秋期：まだ三回生なので、共通した「実力の底上げ」と、採用試験用の勉強の助走として、採用試験過去問演習（その場で解答し、解説する）と自学自習をほぼ交互に実施した。

## 5 指導事例

本年度の個別指導の事例を、いくつか紹介する。

### ★事例一 教育実習指導案プランニング（中学校・書写）

中学校へ実習に行った学生から「書写の時間の実地授業（書写のテキストを使い、【行書の書き方】（硬筆）を教える）をするように言われた。指導手順やポイントが浮かばないので教えてほしい」と指導依頼があった。依頼は、実習直前である。なお、この学生は書道コースの学生ではない。

中学校の国語は書写領域を含むので、理論上、この要請は拒否は出来ない。しかし、実際に書写の授業を実習生が受け持つことはきわめてまれであること、また、一般大学での「国語科教科教育法」では、普通、中学・書写についてまで取り扱う余裕がないことなどから考えると、学生の非力さばかりを責められない事例である。実習先での都合か、行事との絡みか、何らかの事情があったものと思われる。悪意はないにしろ、教育実習の実地授業としてはきわめてハードルが高い。

結果として、指導のポイント（筆記具の持ち方・手首の使い方の指導）と三時間分の授業展開計画とを指導した。実習先では何とかこなしたようである。

今後、「母校実習」が減っていき「割り当て実習」が増えるに従って、これまで実習生を受け入れることがなかった学校の現場に学生

が割り当てられることが予想される。その意味では、このような形の教育実習にも備えておく必要がある。本学は書道コースが設定されているが、今回のように他のコースの学生でも起こり得ることであるため、「中学校免許の指導」の範疇であることは、じゅうぶん意識して指導しておく必要があるだろう。

### ★事例一 採用試験・二次試験（模擬授業）対策（大阪府（市）・中学）

採用試験の二次試験対策として相談依頼があった。二次試験の模擬授業が次のようなものだが、どう対応すれば良いかわからないということだった。依頼は、試験の三週間ほど前である。

#### 模擬授業の条件

① 中学二年生の「B書くこと」について模擬授業をすること（該当する学習指導要領項目を指定）。

② 時間は四分三〇秒。

つまり「四分三〇秒で中学二年生の『書くこと』の授業をせよ」ということである。現実にはこんな短時間で何らかの作業をさせることは無理なので、単元の「見直し（＝単元全体の進行プラン）」の周知と、本時の作業の説明をさせることとした。それと並行して、中学校教科書の購入、『学習指導要領解説』の熟読理解を指示した。また、国語科全体から見た（中・高を通しての）「表現分野での指導のポイント」をレクチャーした。

・単元の見直し↓「自分は三単位（単元配当三時間）でこういう展

開をしたい。そこで生徒諸君にはこういう作業  
をしてもらう。そのねらいはこういう力をみた  
いからである。また、評価はこういう観点から  
行う。」という、単元の全体像を提示する。

・本時の作業説明↓「今日は最初の時間だから、まずこういう作業  
をして、この時間までの終わりにはここまで終  
えたいと思っている」と、本時の展開計画を伝  
える。

二次試験の模擬授業では、これらの説明だけで四分三〇秒は終わ  
るはずである。

試験後、面接官から「大学ではどのように指導されましたか」と  
本人に質問があったらしい。指導した内容を本人が素直に言ったと  
ころ、満足げだったそうである。最近は、特に小・中学校で、単元  
の設定とその「見直し」が重視されているので、やはり模擬授業の  
狙いはそれだったのであると思われる。本人は、見事に採用試験  
合格を勝ち取った。この模擬授業だけで合格したわけではないが、  
対策指導が奏功した例であると考ええる。

★事例三 採用試験・二次試験（小論文）対策（奈良県・高校）  
お盆の前後に、「小論文対策をしてほしい」という依頼があった。  
依頼は、試験の一〇日前である。学生の自宅は奈良、担当者は京都  
であり距離的に遠いこと、また、担当者が樟蔭で研究室をもたず、  
大学での教室の確保も困難だろうと考えたこととあわせ、FAXで  
添削指導を行うことにした。「学生が過去問を解き、問題と解答を

担当者自宅にFAX送付する↓担当者が添削し、解説とともに学生  
自宅へFAX返送する」という形で、小論文一般についての注意事  
項を合わせて指導し、合計八回のやりとりをした。

結果は、残念ながら不合格であったが、短期間での伸びは大きく、  
最初と最後の答案は相当出来映えが違った。今後、卒業論文などで  
文章をまとめる時にも役立つ、貴重な練習になったと思われる。

なお、この「FAX添削」は、大学受験時に高校生でも既によく  
使われている形の指導法であり、担当者も過去の指導経験は豊富に  
ある。赤色の文字が送れない欠点はあるが、機動性が高く、添削後  
すぐに返却できるのが長所である。小論文はワープロやメールが効  
かない（＝答案は必ず手書きである）ので、FAXは原始的だが有  
効な指導ツールである。

これらは一例だが、共通しているのは、一斉指導ではできないも  
のであること、また「教科教育法」の授業では対応しづらいもので  
あることである。特に採用試験は、自治体や校種ごとに形式・内容・  
出題傾向が多岐なだけに、個々の学生の直面している問題もまちま  
ちで、当然それらに合わせた細かい指導が必要になる。つまりはゼ  
ミ形式ならではの利点が生かされた事例であったと言える。

## 6 意義と課題

・少なくとも週に一コマは「教職に関する勉強の時間」としてペーパーメーカーの役割をもたらししている意義は大きい。決して言い訳ではなく「バイトや卒論などで教職の勉強が出来ない」とか、「やる気はあるがなかなか実際には出来ていない」という学生は非常に多い。そんな学生のペーパーメーカー的な役割が果たされている。また、複数の学生と一緒に勉強していることから、相互の刺激もまた大きいようである。学生同士が互いの答案を交換して採点している場面も見受けられた。素朴な例だが、漢字の書き取りなどは他人が採点する方が伸びる（間違った文字を気づかないまま覚え込んでいるケースがあり、自己採点でも修正しづらい）。

・「いつでも何でもOK」というスタンスは大切である。国語教育は、近年学習指導要領の改訂があったばかりであり、現行の「大学入試センター試験」の改革も具体化する中で、大学での教員養成のあり方も変わってきている。その点では、個々の生徒が直面する課題は従来になく多彩になってきており、「何かあったらとにかくここへ行けば解決の糸口が見つかる」という「駆け込み寺的存在」があると心強いに違いない（し、事実、前述のようなさまざまなケースが持ち込まれている）。つまりこの「教職ゼミ」は、いわゆる「教職としての専門性」を持った窓口の役割を学科の責任で設置するようなものである。したがって、意義も大きい

と同時に責任も小さくはない。

・結果として、今年も現役で大阪府（市）中学・大阪府（市）高校の二名の合格者が出ている。実際に勉強をするのは学生であるが、質・量・時機を考えた対策や援助は可能でもあり有効でもあるので、この「教職ゼミ」の取り組みは一定の成果があったとみたい。その点では、次年度以降も設置していただきたい。

・当初の参加者数に比べ、最後までやり通す学生が少ない。教員志望ではなくなったケースも考えられるので、一概には言えないが、「最後までやり通す指導」も必要であろう。

・参加した学生からは、「面接対策もしてほしい」という声が複数寄せられている。面接対策については、例えば教職教養や一般教養のように、国文学科だけにとどまらず、対象学生を広く捉えて対応する方が効果的かもしれない。その点から言えば、面接対策については、国文学科の取り組みにとどめず、全学的なバックアップ体制を確立されることが望まれる。

## 7 まとめ

たった一人の教師を生み出すまでにどれだけの手間と熱意が必要なのか。教員養成専門機関ではないからこそ分かることがある。支援の枠組みはある程度固まったと考えているが、細かな点はまだまだ改良の余地がある。今一番感じているのは「時間との戦い」である。入学時から取り組むことで、さらに夢を実現する可能性が高く

なることは確かである。本来に必要なのは支援する仕組みそのものではなく、それを作り出し、学生と関わりながら改良していく、大学教員の教育に対する姿勢と熱意である。

